
あたしの隣。

雨降れゆい。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしの隣。

【Nコード】

N8623Q

【作者名】

雨降れゆい。

【あらすじ】

おしやれにうるさい恋愛ビギナーの那華は今日から高校1年生。

キラキラと輝くような恋愛を夢みる那華だが・・・。

那華はなかなか恋愛をする気にならない。

その理由に、過去の恋愛が関わっている。

見た目だけの恋をした為、那華の心は癒えぬまま

高校1年生を迎えたのである。

そんな彼女とある男のコ2人が繰り広げていく

恋物語。果たして那華の過去とは・・・っ!?

そして、那華の高校生活はいかに・っ！？

プロローグ

これは、あたしが体験したちょっと切なくて甘い甘い恋物語・・・。

ピピピピッピピピッ

「ああ、もう朝かぁ・・・。」

あたし、梅原那華（うめはらなか）は今日から高校1年生。ちゃんとした恋をしていない、恋愛ビギナーです（笑）付き合ったことは、あるんだけど・・・。

「那華ー、今日は入学式でしょー？お母さん、あとで行くから早く行きなさいー」

「分かってるー」

もう、心配性すぎ。あたしだって早く行きたいけど・・・

「髪が巻けないー<>」

中学は校則が厳しくて、髪さえ巻けなかったんだよねー。でもっ！！あたしの行く高校は、校則ゆるいから髪も巻けるんだあ♪恋愛は駄目なあたしだけど、おしゃれにはうるさいんだよ（笑）

「よしっ！！髪は、ばっちり★制服も・・・OK!!」

「那華、いつまでやってるの！？・・・って。」

準備OKなら行きなさい；；下で、真悸（まき）ちゃん待ってる

わよ？」

「はいはい、行ってきまあいすっ？」

「行ってらっしゃい。」

外にはお母さんの言ってた通り、真憐が待ってた。

「真憐、おはよ♪」

「うん、おはよ。これから、また3年間よろしくね^^」

「んふふーもちろんっ？」

真憐とは小学校からの仲。つまり幼馴染と言っている。

「さっ那華、早く行こ？」

「うんっ！！高校、楽しみだなあ。」

あの苦い恋も終わりあたしは、新たな1歩を踏み出す。

高校生活の中で、きらきらと輝く恋愛をするんだ。

そう心に強く決めたあたしだけど・・・。

やっぱり、あれがある限りあたしの心は癒えない・・・。

プロローグ（後書き）

うあああああああああ↑

どうでしょうか（・ω・） tk自分で作ったけどツツコミ入りたい・・・。

那華、朝飯食ったか？↑ 起きて、着替えて行ってきます じゃないかww

下手すぎて死ぬ↑ もうヤバい。こんなゆいを応援してくれる方はありがたいですっ♪一生愛します（おい・

出逢い

――クラス表 前にて――

「那華ーっ！！あたしたち、また一緒のクラスだよっ」

「えっ！！嘘！！やったよおおおお！！」

「じゃ、教室行こっか♪」

「うんっ」

あたしたちが動こうとした時、何かがあたしの背中にぶつかる。

「いてっ」

「あ、悪イ、悪イ。」

「ん・・大丈夫・・。」

あ、この人の背中がぶつかったんだ。

振り向いてみると、かなりのイケメンッ！！

ま、まあ？面食いじゃないけどこりゃ興奮する。

「あ・・・。じゃあ俺、行く。」

「う、うん。」

「ところで君、何組？」

「えーっとB組ですっ」

「B組か、じゃあよろしく♪」

「へ・・？」

変なことを言い残して彼は去っていった。

「那華っ！！背中、大丈夫！？」

「大丈夫だよ、とにかく教室行こ。」

同中のコが多いのか、顔見知りが多い。

その中には、さっき会った美少年も。

よし、思い切って話しかけてみるか。

真慥は、他のコと話してるみたいだし……。

「あつ、あの同じクラスだったんだね！」

「……あ、俺？」

「うん、君（汗）」

「そうみたいだね。ところでさあ、名前何て言うの？」

「梅原那華だよ。君は？」

「俺は、村石かい。」

「かいくんかあ。」

「お、おう……／＼／＼じゃあ俺は、なかちゃん って呼ぼうかな。」

「うん。じゃあ、よろしくね♪」

「あ、なかちゃんっ。紹介したい友達が、いるんだけど、いいかな？」

「いいよ、誰？」

「ほらっ、りょうっ！」

りょう……？ 確か、そんな名前の男のコ、小学校にいたなあ。

まさか、そのコだったりして（笑）

「初めまし……て……？」

「あ……れ？ りょうだよねっ！？」

「お前は、まさか那華かっ！？」

「うん、そうだよっ♪りよう、戻って来たんだあ。」

「おう、1ヶ月くらい前からかな。」

「何だあ。言ってくればよかったのに＜＞」

「悪い悪い（笑）」

「え、ちよつと待てい、お2人さん。」

「君たち、知り合いなの？」

「うん、小6まで一緒だったんだけどりようが転校したんだ。」

「家も隣同士だったから、いわゆる幼馴染♪」

「ふふーん。りよう、お前こんな可愛いコが幼馴染なんて・・・」

「は？」

「か、かいくんっ／＼変なこと言わないでよ。」

そんなこんなで、入学式は無事終わった。帰り道が一緒な、りようと楽しく会話をしていたら・・・

「なあ、那華。お前俺がいない間、寂しくなかったか？」

「え？どうしたの？」

「いや・・・。」

それからりようは黙りこくったまま。お互いの家の前に着くと、

「那華、あのさ・・・。」

出逢い（後書き）

はい、微妙なところで終了おおおお p ^ ↑
なんか、1話，1話が長い w

今回は普通に長い w

これから、大丈夫なんだろうか ↑

交差する想い（前書き）

真悖の名字、言ってませんでしたね。中野真悖です。
そして、前回登場した りょう の名字は、杉本です。
ではでは、どうぞっ!!

交差する想い

「那華、あのさ……。」

りょう、一体どうしたの……？

「りょう？」

「お前さ、中学でもあんな風に色目つかってたのか？」

「え！？そんな事、してないよお。」

「そ、そうか……。」

「じゃあ、今度はあたしが聞くけど、りょうはいつそう思ったの？」

「い、いや……それは・／／／／／
「……？」

あーまた黙っちゃってる。

張り詰めた空気が流れてる。それを破ったのは、あたしでもりょうでもなく……

「なかちゃんっ？ って、りょう……；；」

かいくんだった。

「かいくん、どうしたの？」

「いや、なんかなかなかちゃんに会いたくなって。家は中野に聞いたよ
♪」

「真、真悸……。」

——sideりょう——

は？”会いたくなった”だと？調子のるんじゃねえよ、かい。

「よう、かい（怒）」

「おお、りょういたんだ？」

・・・（怒）

「ああ、いたよ。つかお前こそ何でいんだよ。」

「いちゃ悪いかよ。」

「那華は優しいから、許すかしんねえがな、俺は許さない。」

「俺がどこで、誰というが俺の勝手。お前はなかちゃんの彼氏じゃあ、ないだろ？」

「・・・っ！お前だって！」

「りょうっ！！いいじゃん、もう。しつこいよ。」

「那華・・・。」

「あれれー？なかちゃんに言われて黙っちゃうってことは、好ー「黙っとけ！！！」」

「りょうっいい加減にして！？かいくんもだよ？

なんか、2人とも変だよ・・・。

あたし、今日は課題とかあるからもう、中入るね。

りょう送ってくれてありがとう。」

ボタン

那華は、家に帰った。そりゃそうだよな。いくら何でもしつこすぎた。

かいの言う通り俺は、那華の彼氏でもねえ。ただの幼馴染だ。

もし、那華が俺じゃない他の男と付き合ったりしたら、心から祝福できるだろうか。・・・いやできない。その男がかいだったら、なおさら。

「おい、かい。話がある。」

思い切って言ってみる。それしかないんだ。

――――sideかい――――

”おい、かい。話がある。” そう言ったりようの目は馬路だ。話しの内容は分かってる。きっと・・・

「なかちゃんのことだろ？ここじゃまずいから公園行くか。」
「あ、ああ。」

俺たちは、公園に着いた。

「そんで？何が聞きたいの？」

俺は譲らねエよ？俺は・・・

「お前、那華のことどう思ってる？」

「・・・りょうが思ってるほど俺の気持ちは、まじじゃねエ。」
「本当か！？」

「ただ・・・あの可愛さには負けるよな……」

「・・・どういう事だ？」

「好きだよ。」

「は？今、まじじゃないって・・・」

「うん、でもさっき確信した。俺は、なちゃんが好きだ。

お前がなちゃんのこと好きなのは、見て分かる。

だが、お前らが幼馴染だろうと関係ねえ。

俺たちは友達だ。ただの友達じゃねえ。

ライバルだ。」

「嘘だろ。」

俺の高校生活は初っ端から、荒れ模様だ。

交差する想い（後書き）

どうでしょうか？2話目にて、もうライバル発言でございます。読んで下さってる皆様。感想けると幸いです。

どんな感想でもいいです。アドバイスなど駄目な点を知らせてくれると、より嬉しいです。中傷的な感想はおやめ下さい。

かいとなか。(前書き)

前回、りょうとかいが公園で話してたところで終わりましたが、今回はその翌日の話です。それでは、どうぞお楽しみ下さい。

かいとなか。

――sideかい――

もう朝か。昨日は……。りょうがなかちゃんのこと、好きなのは知っていた。つか、幼馴染を好きになるのは、よくあるパターン。ただ、なかちゃんは、どうなんだ？
りょうが好きなのか？これは、一か八か、聞いてみるしかないか。
俺は、なかちゃん宛てのメールを作成中。

【t o なかちゃん

おはよう♪今日、なかちゃんに聞きたいことがあるんだ。家に行ってもいい？】
送信つと。

♪チロリロリンッ♪

【t o かいくん

いいよ、私も昨日のこととか聞きたいし……。
じゃあ、家の前で待ってるね♪】

よし、じゃあなかちゃん家、行くか。

俺はなかちゃん家に着いた。

ピンポン。

「あっかいくん。前で待ってなくてごめんね<>ちょっと髪が（汗）

」

「なかちゃんは、いつもキマってるしね★」
「もう、かいくんっ／＼／」

「あ、それでね？聞きたいことってのは・・・」
「・・・。」

「なかちゃん、りょうのこと好き？」
「！？ど、どうしたの・・・？」

この動揺っぷり・・・。やっぱりりょうのこと好きなのか。

「りょうのことは、幼馴染としか思ってたないよ？」
「え？」

「まさか、かいくん。あたしがりょうのこと好きとでも？」
「うん。違うの？」

「まさかっ（笑）」
「ああ・・・よかったあ・・・。」

「え？」
「あ、何でもないよっ；；」

ここで気持ちバレちゃ意味ない、意味ない。
でもよかった。

「なかちゃんが聞きたいことって？」
「ううんっ！！もう大丈夫♪」
「そっか・・・じゃあ学校行こっか？」
「そうだね。」

このとき、なかちゃんの顔が少し曇ったことに俺は気づくことが出来なかった。

かいとなか。(後書き)

今回は、短いです。次からが、急展開になります!!
感想、くれると嬉しいです。アドバイスなども教えて下さると
幸いです。ですが、中傷的な感想は、やめて頂きたいです。

嵐の前（前書き）

前回と同様、かい目線でご覧下さい。

目線が変わる際は、文章中でお知らせ致します。

それでは、ごゆっくりどうぞ。

嵐の前

俺たちは学校に着いた。

なかちゃんとは登校中いろんな話をした。

恋愛の話しも出してみたけど、鈍感なのか反応がいまいち……。りょう、苦勞してんな（笑）

でも……。好きな人の話を出したときに見せたあの顔は一体――！？

俺は、その謎を知りたかったがとりあえずりょうを見かけたので話しかけてみる。
なかちゃんも、中野んところ行ったみたいだし。

「りょう、おは。」

「おう」

「なあに、暗くなってるの？ 高校生活はまだ始まったばかりか？ ……恋愛もな^^」

「……。俺、先に教室行くわ。今日の那華おかしいし。」

「あ、そう……。」

やぱりょう、気づいてたんだな。さすが幼馴染……。とても言っとくか。

……。っと、もうすぐ予鈴だ。

マッセン（担任）の大きい声でHRは始まる。今日のHRは

席替えみたいだ。そうだな・・・名前順だったしな。

くじを引き黒板に張ってある番号表を見ると・・・窓側の1番後ろだ。

別にそんなのはどうでもいい。ただ・・・

「なかちゃんっ！！席どこになったの？」

「えーと、窓側の1番後ろだよ。隣のコ誰だろう・・・。」

「・・・っ！！隣のコ、俺だよ。」

「嘘っ！！よかったあ。意外と緊張してたんだよ。

かいくん、よろしくね。」

「おう、なかちゃん誕生日ってー」「りょうーっ席どこ？」

・・・りょう、ここでも邪魔するか。しかも
なかちゃんから話しかけに行ったなんてな・・・。
盗み聞きしてみる。

「窓側の後ろから2番目。」

「あ、やったあーっ！！あたしの前だね^^」

「那華の隣は誰なんだ？」

「えーっとね、かー」「俺だよ。」

「か、かいくん・・・。」

「かいか。」

「そっ♪俺^^」

「・・・」

「・・・かいくん。」

席替えをして、一通りの授業を受けて今日は幕を閉じる。

席が隣になったのもつかの間。

1ヵ月後、りょうとなかちゃんの間に小さな亀裂が入り始める。

嵐の前（後書き）

そういえば、りょうとかいが知り合ったのは

中学時代です。かいが転校した学校にりょうがいて

仲良くなったわけです。転校と言っても隣県にある

中学校で、高校生になる前にまた地元に戻ってきました。

偶然か運命か、その頃 りょうの父親も隣県に転勤が

決まりかいの後を追って那華たちの通う高校へ入学が決まりました。

理由（前書き）

なか目線で書きます。

そして、前話から1ヶ月経っていますがあまり気にしないで下さいね。

それでは、ごゆっくりどうぞ。

理由

「……」

今は中休み。誰もいないシンとした教室でただ1人。

そういえば、ふいに思い出す。

1ヶ月前にかいくんがあたしに聞いたこの言葉。

『なかちゃん、りょうのこと好き?』

あの言葉にはどんな意味が込められていたの?

1人の男性として?

友達として?

幼馴染として?

どれが当てはまるのか、よく分かんないよ。

「……。」

グラウンドから聞こえてくる声が、やけに心地いい。

その時、走馬灯のようにつけめぐる思い出したくないあの記憶――

『隼人っ隼人っ!! 笑顔を見せて……お願い、お願いだから……』

『那華、泣くな。お前は1人じゃない。俺がついてる……』

『隼人、また笑ってよ・・・？無邪気な顔で笑ってよ・・・？』
『ごめん・・・な。それは無理なお・願いかもしれない・・・。』
『隼人お・・・＜＞』

「・・・。」

私は絶対に恋はしない。それはあの時決めたはず。

なのに・・・この気持ちは何？ココロの中にあるこの気持ちは。

私はふいに思い出してしまう。元カレであった池谷隼人のくしゃつとした

笑顔を・・・。

「隼人、会いたいな。隼人・・・。」

「なかちゃん？」

バサッ

私は思い切り振り返る。そこにいたのは、まぎれもない

「かいくん・・・。」

「ねえ、【隼人】って誰？」

「あたしの元カレだよ・・・。」

「うん。」

「今の聞いてた？」

「微妙に。ごめん。」

「ううん、大丈夫・・・じゃないよ。本当は。」

「え？」

「元カレとはね、別れたんじゃないんだ。」
「・・・。」

*****回想シーン*****

中学2年のあたしは世間でいうリア充をしていた。

「隼人お、あの公園に行こうよっ」

「また、あそこか。お前は好きだな^^」

「うん、だって隼人が告白してくれた場所だもんっ」

「ばっ、馬鹿／＼／言うんじゃないエ・・・。」

【隼人】とは私の彼氏。

あの公園ってのは、花道が続く小さな公園。中学で知り合った隼人があたしに

告白してくれた場所。

「うわああ、久しぶりに来たけど変わってないねーっ」

「だな、俺たちも・・・だろ？」

「うっ、うん／＼／ずっと一緒だよ？」

「おう。」

あたし達は約束のキスを・・・。

「・・・／＼／やっぱり緊張するね・・・。」

「そうか？俺は那華が可愛くて緊張するんだけど。」

「はっ、隼人っ／＼／」

「あ、可愛いー」

あたしが指、さしたのはボールで遊ぶ小さい子供。
まだ3歳くらいかな？

「俺も子供欲しいいいいいー」

「まだ中学生でしょっ（笑）」

「那華となら、別に・・・いいけど？」

「まだ昼だからあああああ／／／／／」

「あははっ那華、好きだよ。」

「あたしも？」

その時だった！！

「あっ、ボールしゃんが・・・ままあ・・・＜＞」

「あーボールが行っちゃったんだ。あたし取ってくる。」

「頑張れよー^^」

「うん♪ 僕、ちょっと待っててね？お姉さんがとってくるから。」

道路に出ちゃったんだ。でも今は車も来てないし・・・。
行くかっ！！

キキーーーーッ

ここからの記憶はよく覚えてない。

ただ今は隼人が私の上に乗ってて・・・。隼人のいろんなところから
血が・・・

血っ！？

周りを見ると・・・人が集まっている。私の予想だと。

ボールをとりに行った私は隣にあった駐車場から車が出てきたことに気づかず、

そのまま渡った……。それに気づいた隼人が助けしてくれたって感じかな。

読者様、分かったでしょうか？（笑）

そんなことより……

「隼人っ大丈夫!？」

「あ、ああ。那華は……無事なんだな。」

「あたしは無事だよっでも隼人がああ」

「俺は大丈夫だよ。」

「大丈夫じゃないでしょ……。そんなに血出して……。」

「お前を護りたかったんだよ……。」

「隼人っ隼人っ!! 笑顔を見せて……お願い、お願いだから……。」

「那華、泣くな。お前は1人じゃない。俺がついてる……。」

「隼人、また笑ってよ……。？ 無邪気な顔で笑ってよ……?」

「ごめん……。それは無理なお・願いかもしれない……。」

「隼人お…….<>」

救急車が来たのは、それから数分後。

あたしは軽傷で済んだけど……。

隼人の顔には白い布がかぶせられてある。

予想はしてたけど……

「嫌だよ……っ隼人!! 目さましてよ!!
あたしを1人にしないでよ……っ」

ひっく・・・ひっく・・・

「隼人、あたしを護ってくれてありがとう。最高にカッコよかったよ。

あたしの大好きな隼人。隼人、あたしここで約束する。

もう恋はしないよ。隼人以外、誰も好きにならない。

隼人が1番だからね・・・？じゃあ、ゆっくり休んでね。」

それからあたしは、自分のことを責め続けた。隼人が逝ってしまったのは

あたしのせいだと言っても過言ではない。それを隼人に言ったら否定されそうだから黙っておこう。あたしはあたし自身に鎖をつける。

絶対に恋はしない・・・。

あたしは、かいくんに全てを話した。

「なかちゃん、話してくれてありがとう・・・。」

この一言を言ったらそれっきりかいくんは何も言わなかった。

その代わりにあたしが泣き止むまですっと傍にいてくれたんだ。

理由（後書き）

那華の昔の話でした。

実はこの物語。私のクラスメイトの男子の名前が使われています。まず那華の幼馴染、りょうの名字の

「杉本」は私の好きな人の名字です。「りょう」という名前もお笑い系の男子の名前です。そして、

那華の元カレ、「池谷隼人」の「池谷」は仲のいい男友達の名字です。

いない人間（前書き）

なか目線で書きます。

ごゆっくり、どうぞ。

いない人間

「なかちゃん、落ち着いた？」

「うん、だいぶ……。かいくん、ありがとう。
弱音聞いてくれて。」

「これくらい大丈夫だよ、女の子の弱音聞いて
あげられないなんて、男として失格だね。」

かいくんは、誇らしげに言う。

思わず笑ってしまいそうなほどの、どや顔だ。
だからこそ……。傷つけたくないんだ。

「……。かいくんと初めて出会ったとき……」
「？」

「かっこいい美少年だなんて思ったんだ。
話してみたい……。そう心が叫んでた。」

偶然か、運命なのか。あたし達は一緒のクラスになったね。
あたしの幼馴染と、かいくんは仲がよくて……。
偶然なんかじゃない。これは運命なんだ。

って思ったよ。」

「なかちゃん？ どうし——「傷つけたくない。」
「え？」

「これ以上、傷つけたくないって思ったと同時に、これは
あたし自身も傷つかない様にしたい、悪い言葉なんだ。
ただただ、自分保身なあたし。」

身勝手な行動に出たから、皆が傷つく。隼人のご両親だって。
ボールをなくした小さい子の親も、自分の子供のせいで、
人が死んだ……。そう思ってる。」

「・・・」

「みんなをあんな気持ちにさせたのは、全部あたしなんだよ・・・っ
あたしなんか、何の役にも立たない。
知らない人間なんだよ・・・っ」

「なかちゃんっ!!」

ビクッ

いきなり大声を出したかいくんに、思わず私は1歩引く。

「知らない人間？誰が決めたんだよっ」

「あたしでしょ？」

「なかちゃんがいるか、知らないかなんて、なかちゃんが

決めることじゃない。それにさ、知らない人間なんていないんだ。

みんな、必死に生きてるじゃないか。」

生きてる・・・。そうだ、小さい雑草だって・・・。アリンこだつて、

いつ人間に踏まれるかなんて分からない。だけど生きてるんだ。

必死になって・・・。隼人だって、あの時必死に生きようとした。

隼人が残してくれた、あたしの命。

何て、バカなこと言っただろう。

「・・・なさい。」

「？」

今度は、もう少しはっきりとした声で。

「ごめんなさい。」

「分かってくれば、いいんだ。俺もごめん。」

怒鳴ったりして。でもね、絶対にいらない人間なんて
もう言わないで。なかちゃんを必要としてる
人間は、もうここにいないじゃないか。」

「かいくん、ごめんね・・・っごめん、」
「・・・」

「ありがとう・・・」

キンコーンカーンコーン

「なかちゃん、予鈴だよ。幸い、誰も教室には入って
来なかったけど、皆戻ってくるから。」

その泣き顔をどうにかするんだよ 笑」

あ、いつの間にかあたし・・・泣いてたんだ。

「うん、じゃあちよっど行ってくるねっ！」

あたしが、ドアから出ようとしたとき、
何かにぶつかる。

どすんっ

「え・・・りょう・・・。」

み、見てた!?

いない人間（後書き）

さあ無事、那華の過去もよく分かり
続きが気になるところですが・・・っ
なんと、ドアのそこにはりようがー！？

那華と、かいの話し全部聞かれてたのか・・・

気になる続きは、次話でっ 笑

その女の子とは・・・？（前書き）

今まで、かい寄りだったんでね。

りょうを早く登場させないと・・・っ

と、まあ急いでた主でございます 笑

本日もなか目線どうぞ♪

その女の子とは・・・？

「え、りょうつ！？」

う、嘘・・・。てことは・・・

「聞いてた？」

りょうは首を縦に振る。

あたしの大声に驚いたのか、かいくんもやってきた。

「なかちゃん？ 大声出して、どうし・・・っ！！」

かいくんは目を見開いて、りょうとあたしを交互に見る。

「りょう、俺は悪いことしたとか思っていないかな。
俺が何しようとか俺の勝手だ。」

そう言うのと、かいくんは右手をひらひらと振り教室を出てく。

「那華、お前も1回顔洗ってこい。」
「う、うん。」

あれ・・・？何も言ってこないのかな。
それとも、気にしてないとか。

| . . .

ぱしゃっ ぱしゃっ

濡れた手でスカートのポケットに入っていた
ハンカチを取り出す。

「予鈴鳴ってんだぞー、早く教室入れー」

あ、マッセン。あと1分くらいで本鈴なるのか。

そろそろ入らないと。

あたしは足早に教室へと戻って行った。

| . . .

3時限目は、あたしの得意科目【社会】だった。

だけでも浮かない顔で校庭を見る。

この心の中にあるモヤモヤが何かも分からぬまま . . .

『なかちゃんっ!!』

かいくんが本気であたしを、怒鳴ってくれたときの顔を

思い出すと同時に、もう1人の顔も浮かべる。

りょうの、あの悲しそうな目。

大切な幼馴染、これ以上の関係になれる日はやってくるのだろうか。

そう考えていたら . . .

「えー、ここはテストに出るから覚えとけよー。
学級委員、号令。」

「きりーつ。ありがとうございましたー。」

「ありがとうございましたー」

あ、もう授業終わったんだ。

「那華っ！那華っ！」

「あ、真悸。どうしたの？」

「何か、りょうくん。女の子に呼び出されてるよ？」

真悸が指差す方向を見ると。

ドアのところに、頬を赤く染めてる女の子と、りょう。

「そいえば、りょうくん。最近、女の子とよく出かけてるの
見たなー。」

「え？」

「あたしが委員会で帰りが遅くなったときとか、私服のりょうくんと
女の子見かけるんだよね。もしかしたら・・・。」

真悸は、その先の言葉を言わず黙っていた。あたしに気が
つかったのだろうか。

でも、あたしは分かった。”告白”だということを。

今、りょうがあ女の子に告白されそうになってるんだ。

でも、あたしにはそれを止める権利さえない。

「おさらばだな。」 (前書き)

約2ヶ月放置で、すいませんでした。

今回は那華目線です。

「おさらばだな。」

ガラッ

あ、りよう戻ってきたんだ。告白の返事・・・どうしたんだろう。

あたしはふと時計を見る。この高校は毎休み時間が15分ある代わりに、

授業時間が長い。下校時間も、もちろん遅くなるが

高校生だからと、授業時間 共に休み時間を長くすることを真っ先に

許したのは、紛れもない。我が担任だ。

次の予鈴まであと10分ある。りようは1人で外を眺めているみたいだし、

聞いてみるとするか。

「りようっ」

「おお、なかか・・・。」

ぼんやりを外を眺めてるりょうは、一向にこちらを向いてくれない。

「女の子に告白されたんだってねー？」

「・・・。」

「りょう。」

どうしたんだろう。

「もうあたしとは話してくれないのか、あはは。
彼女さん、嫉妬深いのかな。」

いつの間にか、涙声になってるあたしの声を聞き

やっと振り向いてくれたりょう。

目に涙も浮かべてるんだから、驚いちゃうよね。

でも、何でだろう・・・。すごく悲しいよ。

「！！　んなわけじゃ・・・。」

「りょうにはもう、可愛い彼女がいるもんね。」

さっきの告白もOKして、リア充になったりょうに、
ただの幼馴染のあたしは必要ないね・・・。」

作り笑いをした、あたしに気づいたのだろう。

うつむき、気まずそうな顔をしたまま彼はこう言うんだ。

『そうだな。那華も可愛いが、あいつの方が俺は好みでな。前々から気になってたし、告白されてOKしたんだ。』

お前とは、もうおさらばだな。』

「っ!!」

ガラガラッ・・・ダダッダダ・・・

！・・・

無我夢中で走り続けたあたしは、大きな屋上のドアを開け、ど真ん中に寝転がる。

期待してた。りょうなら、「お前は大切な幼馴染だ」って言うってくれると思ってた。

オサ ラ バ ダ ナ

あれ・・・何でだろう、どうしてだろう。

りょうのこと祝福してあげたいのに、涙があふれ出る。

「おめでとう」って。

「よかったね」って。

言ってあげたいよ。

どうしてこんなに苦しいの。

自惚れてた。りょうの一言、一言があたしの気持ちを弾ませて

りょうはあたしのことが好きなんだろうって思ってた。

今日、かいくとあたしが2人きりでいたことについて、何も言っ
て来なかったのはあたしのことが好きじゃないからなんだね。

「・・・ふえっ・・・ひっく・・・うう・・・。」

「悲しいよ。うわあああああんっ・・・うつ、ふえっ・・・。」

ガタッ！

そのとき、ドアが力強く開いた。

かいくんが、あたしのことを思い切り抱きしめてくれて

あたしはもっと泣いた。

そのまま2人で下校まで、屋上で過ごし帰るときマツセンに見つか

って

こっぴどく叱られたのを覚えている。

恋敵（前書き）

かい目線です。

那華とりょうが喧嘩をする、少し前の話からです。

恋敵

・・・・・・・・

「なあ、今日ゲーセン寄っていかねー？」

「ああ俺、無理だわ。」

そう言っただけは、なかちゃんの方を

チラッと見る。今日一緒に帰れるかな・・・。

「りょうつ」

なかちゃんが、りょうに話しかけてる声が聞こえる。

その声を遮るかのように、俺は友達とまた話し出す。

この声を聞くまでは・・・。

「―お前とはおさらばだな。」

ふいに、りょうが言った言葉。

那華ちゃんは、目に涙を浮かべ、教室を出て行った。

は？どうなってるんだよ。

「おさらば」？お前はなかちゃんのことを好きなんだろう？

「おい、りよう!!」

「何だよ、かい。」

「今のなんだよ。」

「ふっ、那華を振ったまでだ。」

何でだよ……。そんなこと言ってるけど

お前……。めっちゃ落ち込んでんじゃねえか。

「なかちゃんは、お前に告白すらしてねえのに、
んなこと言ってんじゃねえよ!!」

そう吐き捨て、俺もなかちゃんのように、教室を飛び出し

屋上へ行った。

！・・・

そこには、案の定なかちゃんの姿。

黙って、ぎゅっと抱きしめると、もっと

泣き出したが、安心したらしく、

なかちゃんは泣き止んだ。

「今日は授業、サボろっか♪」

泣いて、腫れた顔をこちらに向け、首を縦に振る。

りょう……。お前は自分で自分の大切なものを

傷つけた。今さら後戻りしようたって

この俺が許さねえ。

この後、俺となかちゃんは下校時 マツセンに

こっぴどく叱られた。

好きだから（前書き）

なか目線ですが、途中かい目線になります。

それでは、ごゆっくり♪

好きだから

・・・・・・・・

学校へ行く足取りが重い。

夏の鬱陶しい暑さから、首元が汗ばむ。

あのあと、かいくんとマツセンに怒られ
一緒に帰った。

お互い空気を読んだのか、無言だった。

そして今日。学校へ行くの・・・嫌だな。
りょうに会うのが辛いんだ。

彼女と、登下校してるのかな？

一緒にお昼食べるのかな？

手？いだのかな？

キス・・・したのかな？

うつむきながら、そんなことを考えていたら
近くから、音楽の音が聴こえる。

あれ・・・どんどん近づいてくる。

「~~~~♪ あ、なかちゃん！」

その主はウォークマンを聴いてるかいくんだった。

「おはよう、かいくん。」

「昨日は大丈夫だった？」

「う、うん。結構、りょうの存在は大切だったからね。
急に彼女ができて驚いちゃったんだ。」

その言葉を聞き、かいくんは顔をしかめ言う。

「りょうに彼女・・・できたのかな。」

「え、何言ってるの？」

「いや、ほら。明らかになかちゃんのこと
好きって感じだったし。」

あたしだって、そう思ったよ。けど・・・

「幼馴染って言ってるけどね、3年間会ってなかったし
高校入ってまだ数ヶ月。

あたしのこと好きになん・・・っ!!」

自分の目を疑った。

あたし達の前を楽しそうに歩く、りょうとその彼女を
見つけてしまったのだ。

「ほ、ほら! やっぱり付き合ってたんだよ。」

「あ、そうだね。」

「かいくんっ! 早く行かないと、
遅刻するよっ!？」

「・・・うん。(そんなこと言って。この時間なら遅刻するはずも

ないのに。)

・・・

ざわざわざわ

「じゃあ、りょうくん。また後でね。」

「おう。」

りょう達、今来たんだ。

一応イケメンなりょうに女がいると知った、
我がクラスの女子たちが騒いでる。

「うわー、ショック。うち、まじめに杉本くん(りょう)のこと
好きだったんだけどなあ。」
「うちもー。でも、彼女いても、杉本くん好きなのは
変わらないからねっ><」

想いを伝えず、失恋って可哀想だな。

その頃、学校に着いたりょうを呼び出す
かいくんの姿があった。

sideかい

俺は、彼女といちゃいちゃ登校してきたりょうを

屋上へ行く階段に呼び出す。

「なあ、りょう。お前さ、本気であのこのこと

好きなの？」

「そうだったら、悪いかな？」

「お前さ、俺に言っただじゃねえか。」

『那華のことが好き』って。

あのキモチは嘘だったのか!？」

りょうはうつむきながら、髪を乱暴にかき回し、ため息をつく。

「はあ。お前は騙しきれねえか。」

「・・・。」

「あいつが告ってきたから、OKしたのはな。那華が好きだからだ。」

「は？」

「最近さ、かいと那華が仲いいの見て妬いてたんだ。だから、俺が誰かと付き合えば那華のこと忘れられるかなって。」

でも無理だった。好きな女に泣かれるとキツいな。」

なかちゃんの気持ち知ってて言ってるのか？大切な幼馴染のために、泣いたのによお。

「おい。そんな甘い気持ちでなかちゃんのことが好きだとか、言うんじゃないよ。」

・・・俺がもらうからな。」

そう言い、俺は教室へと戻っていった。

「・・・」

2人の内 1人（前書き）

久々の更新です。

なか目線でいきまーす＊

2人の内 1人

かいくんが、りょうを呼び出して帰ってきた2人は、ずっと無言で。お互い、何かに悩んでいるようだった。

・・・・・・・・

「はあああー、終わったあ授業。」

あたしが大きなため息をつき、机の上で寝ようとすると、まきが呆れた顔でやってきた。

「那華、あんたあの2人・・・どういうことよ?」

「あたしだって、分かんないよ。」

何があったんだろう。でも、きっとあたしが踏み込んでいいことじゃない。だけどやっぱり・・・

「気になるよ」

「どっちのことが?」

「そりゃあ、2人とも。」

あたしの発した言葉を聞き、真悻は静かに話し出した。

「あのね、この学校には那華を恨んでる女共がたくさんいるの。」

いきなり、こんなことを言い出す真悸にあたしは目を見開かせたま。

「え・・・なんで？」

「そりゃー、りょうくんとかいくんと仲がいいからでしょ。」

あの2人は学校でも1，2を争うほどのルックス。

クールなりょうくん、アイドル系かいくん・・・真反対の2人がいれば、

女共はその、どちらかを好きになるでしょう？」

「う、うん。」

真悸の真剣なまなざしに、思わず唾を飲み込む。

「そんな2人と仲がいい那華は、妬まれるに決まってるじゃない。りょうくんとは幼馴染だし・・・ね？」

ほかの女からしてみれば、どっちか1人にしろってことでしょ。」

「あ、そっか。」

「そういえばさ——」

真悸が違う話題に話をそらしたけど、あたしの耳には入ってこなかった。

あたしは・・・2人と、いちゃいけないのかな？

・・・

綺麗な橙色の夕日に照らされて、アスファルトに映る自分の影。その自分を見ながら、あたしはとぼとぼと家路を歩く。

「那華ーっ!!」

見覚えのある声に、振り向けばそこには……りょうがいた。

「りよ、りょう？ どうしたの？」

息を切らして、立ちすくんでるりょうの背中とさすろうとした。

でも、やめた。ダメだ、りょうには彼女がいる。あたしなんかに触れていい存在じゃないんだ、もう。

「こんなに息切らして、あたしに何か用事？」

平静を装い、笑顔を振りまく。

涙が出ませんように……。

「あ、ああ。」

「もう！ あたしなんかより、彼女さん大事にしてあげなよー？
せっかくできた、りょうの初彼女じゃーんっ」

いやだ、自分で言って傷ついてる。

「そ、そうだな。」

何で、こんなに曖昧な返事なの。

自分の中にあるモヤモヤとした感情を振り払うかのように、

あたしはいつもより少しだけ、大きな声で、りょうに訴える。

「あたしに用ないなら、彼女さんのところ戻んな？」

「え、でも――早く戻ってよ!!!!!!」

「・・・あ、ごめん。」

どうしよう、ついカッとなって。

「ううん、あたしもごめん。」

「・・・。」

「やっぱ、ダメだなー。りょうに彼女ができるの。」

何だろ、ただの幼馴染なのに辛いや。」

「え、那華？」

くるっと後ろを振り返り、りょうに背を向け、去る。
こうでもしないと、抑えきれない。あたしの気持ち。

「じゃあ、また明日ねー。」

「ああ、また明日。」

果たして、明日あたしはりょうと話せるのだろうか。当たり前だった。「また明日」って

言うのは。でも彼女ができたりょうと、今まで通り話せる自信がないや。

1人でむなしく帰っているとき、バッグの中に入れていた携帯のバイブが鳴る。

ディスプレイに表示されていたのは・・・

『村西 かい』の4文字。

どうしよう、出れない。

出れない・・・？何で、かいくんは友達のはず。出れるはず。

でも、中々指がボタンを押してくれない。

あ・・・、今日真憐に言われた言葉を思い出した。

あたしは、2人のうち1人を選び、って言われたらどっちを選ぶんだろう。

んー。どうなんだろう。

悩み続けてるあたしは気づかない、この鳴り続けているバイブ音と。

2人の男の本当の気持ちなんて・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8623q/>

あたしの隣。

2011年10月6日15時06分発行